

読み書き行動から捉えた幼児の早期スクリーニング検査作成の試み

都 築 繁 幸 (愛知教育大学障害児教育講座)
新 美 奈 緒 子 (高浜市立吉浜小学校)

要約 軽度発達障害を早期に発見し、適切な支援を早期に開始し、小学校に入学する前段階で支援体制を整えていく必要があろう。軽度発達障害の子どもたちは、コミュニケーションに何らかの問題を示していることから保育園・幼稚園の段階でこの視点から子どもの実態を捉えていくことが可能である。コミュニケーション行動の中から「読み書き行動の基礎要因」に着目し、早期に読み書き行動の基礎的な側面に困難を示す可能性のある子どもを発見できれば、入学直後から、障害を見過ごすことなく、適切な支援を行うことができると考える。読み書き行動から捉えた幼児の早期スクリーニング検査の作成を試みた。

キーワード: 読み書き行動, 早期スクリーニング, 発達障害, コミュニケーション

I. はじめに

平成14年に文部科学省が実施した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」では、学習面ないしは行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は6.3%であることが示された。この困難を示す児童生徒は、軽度発達障害が疑われる群であり、何らかの支援が必要であるとされている。

軽度発達障害が疑われる群は、小学校に入学し、読み書きの指導が始まると読み書きに困難を示すことが多い。読み書きは学習の基礎であることから、読み書きに困難を示す子どもは、学習全般に遅れを生じていく可能性が高い。

最近では、幼児期から軽度発達障害と診断を受けている幼児あるいはその疑いのある子どもには、小学校の教師は入学と同時にその子どもの支援に特に目を向けている傾向にある。

ところが、診断も受けておらず、また疑いがないと考えられていた子どもの中には学習が進むにつれて学習面に遅れが生じる場合が多く、そうした事態になって初めて担任が気になります。入学してまもなく担任の目に留まればよいが、担任の気づきが遅いと適切な支援がされないままになる可能性が高い。

軽度発達障害を早期に発見し、適切な支援を早期に開始することができ、軽度発達障害そのもの、あるいは二次障害が軽減できるであろうと考えるならば、小学校に入学する前段階で支援体制を整えていく必要があろう。軽度発達障害の子どもたちは、コミュニケーションに何らかの問題を示していることから保育園・

幼稚園の段階でコミュニケーションの視点から子どもの実態を捉えていくことが可能である。

今回は、コミュニケーション行動の中から「読み書き行動の基礎要因」に着目した。すなわち早期に読み書き行動の基礎的な側面に困難を示す可能性のある子どもを発見できれば、入学直後から、障害を見過ごすことなく、適切な支援を行うことができると考える。

本報告では、読み書き行動から捉えた早期スクリーニング検査を作成することを試みた結果の一部を紹介する。

II. 方法

(1) 対象児

今回の分析の対象は、X市内の幼稚園、保育園に在籍する幼児355名とした。その内訳は、年少児126名、年中児97名、年長児132名である。

表1に示される分類基準に従い、①～④に該当する幼児を「ハイリスク児群」、⑤の幼児を「健常児群」とした。その人数を表2に示した。

表1 幼児の分類

- ①いずれかの場所(相談所, 病院, 民間クリニック)で軽度発達障害等の診断を受けている幼児である。
- ②「教員の加配の対象として考えて欲しい」と考えられる幼児である。
- ③巡回相談等ですでに「気になる子ども」として話題になった幼児である。
- ④現在では、気になる子どもとして話題になっていないが、今後は、話題にしたい幼児である。
- ⑤「気になる子ども」としては感じられない幼児である。

表2 健常児群・ハイリスク児群の人数

	年少児		年中児		年長児	
	F群(45～50ヶ月)	E群(51～56ヶ月)	D群(57～62ヶ月)	C群(63～68ヶ月)	B群(69～74ヶ月)	A群(75～80ヶ月)
健常児	35人	33人	26人	25人	35人	33人
ハイリスク児	27人	31人	23人	23人	37人	27人

(2) 質問紙の内容

質問紙は、生年月日等の幼児の実態を記述するフェイスシートと幼児の読み書き行動の基礎を評価する項目から成り立っている。

今回は、読み書き行動に関係していると考えられる事項を30項目取り上げ、それらの項目が早期スクリーニング検査の項目として指標となりうるかを検討することとした。

表3 幼児の読み書き行動の基礎と考えた質問項目

1. 先生から指示された内容を行動に移せる。
2. 作品を作る時、はさみを一人でうまく使える。
3. 自由遊びの場面などで、平均台を一人でバランスよく渡れる。
4. 自分の名前や友達の名前を区別できる。
5. 例えば「わ」と「れ」の違いなど、文字の細部を理解できる。
6. ぬりえやお絵かき等で、△や□をうまく描ける。
7. 人物画を描いた時に、人物の首や肩をうまく描ける。
8. 絵本等を見て、絵本の一部（例えば、アンパンマンなど）を描ける。
9. 先生の手遊び（げんこつ山のたぬきさん等）を模倣できる。
10. 自分ひとりで手遊び（げんこつ山のたぬきさん等）ができる。
11. リズムをとるのがうまい。
12. 読み聞かせの後で、その内容を聞いたら答えることができる。
13. 絵本・紙芝居などの読み聞かせが好きである。
14. 一人で絵本を見ることが好きである。
15. しりとりや回し文（さかさことば）に興味がある。
16. 場の雰囲気や人の気持ちをうまくくみ取れる。
17. 一つの活動が終わった時、気持ちの切り替えがはやい。
18. 先生に指示されなくても一人で次の行動に移せる。
19. 今のできごとと過去の経験とをつなげて考えられる。
20. 聞き返しが多い。
21. 先生の手拍子をうまくまねすることができる。
22. 人や物の名前を覚えるのが苦手である。
23. 靴を履くときに、右左がわかる。
24. 自分の服やカバンなどをうまく片付けることができる。
25. 体の中の目や口や耳などの位置を当てることができる。
26. 教室や運動場で、人や物にぶつかることが多い。
27. 周りの視覚的刺激が気になる。
28. どんな活動テーマでも積極的に活動に参加する。
29. ことばの理解は良いが、言葉の数が増えない。
30. 周りの聴覚的刺激が気になる。

(3) 手続きと結果の処理

本調査は、質問紙法とし、回答者は、幼児の保育担当者とした。保育担当者には、幼児の日常の行動から評価することが求められた。各項目は、5段階尺度になっており、「A：大変よくあてはまる」から「E：全然あてはまらない」となっている。「大変よくあてはまる」を5点、「全然あてはまらない」を1点とした。

各群の各項目に対する平均値を求め、健常児群とハイリスク児群間で差の検定を行った。

Ⅲ. 結果と考察

ここでは、すべての年齢群で有意差のみられた項目、主に年少児と年長児で有意差がみられた項目、主に年中児と年長児で有意差がみられた項目、いずれの年齢でも有意差が見られなかった項目、その他の5つに分類して示す。

(1) すべての年齢で有意差のみられた項目

すべての年齢群で有意差がみられた項目を図1、表4に示す。図中の番号は、質問項目の番号を示している。

表4 質問項目

1. 先生から指示された内容を行動に移せる。
11. リズムをとるのがうまい。
16. 場の雰囲気や人の気持ちをうまくくみ取れる。
18. 先生に指示されなくても一人で次の行動に移せる。
19. 今のできごとと過去の経験とをつなげて考えられる。
21. 先生の手拍子をうまくまねすることができる。
22. 人や物の名前を覚えるのが苦手である。

これら7つの項目は、すべての年齢群で有意差が見られた。したがって、この7つの項目は気になる子どもを見分ける指標となり得る可能性が高いといえる。

(2) 主に年少児と年長児で有意差がみられた項目

主に年少児と年長児で有意差がみられた項目を図2、表5に示す。図中の囲み線が付いている群が有意差がみられた年齢群である。

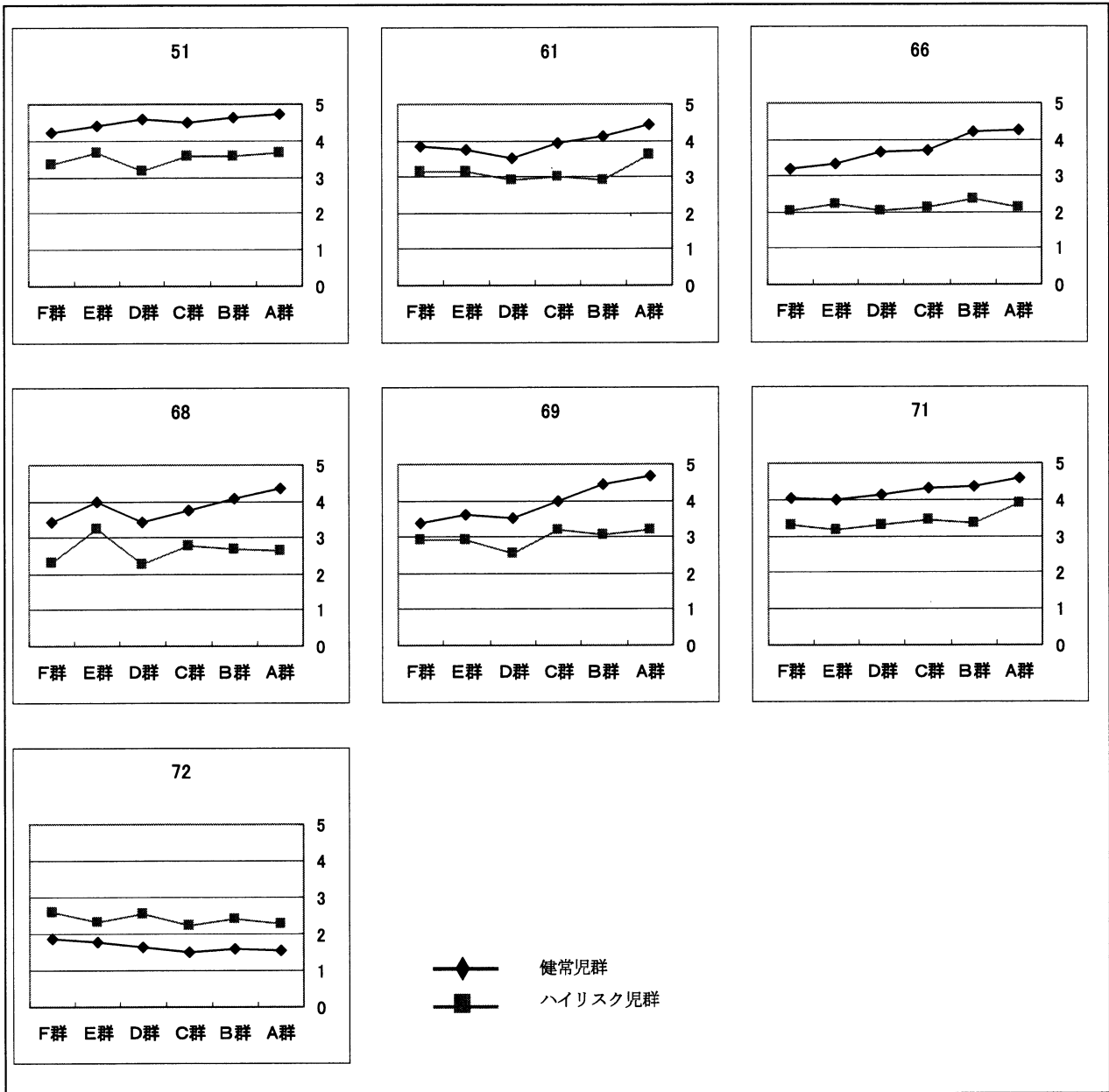
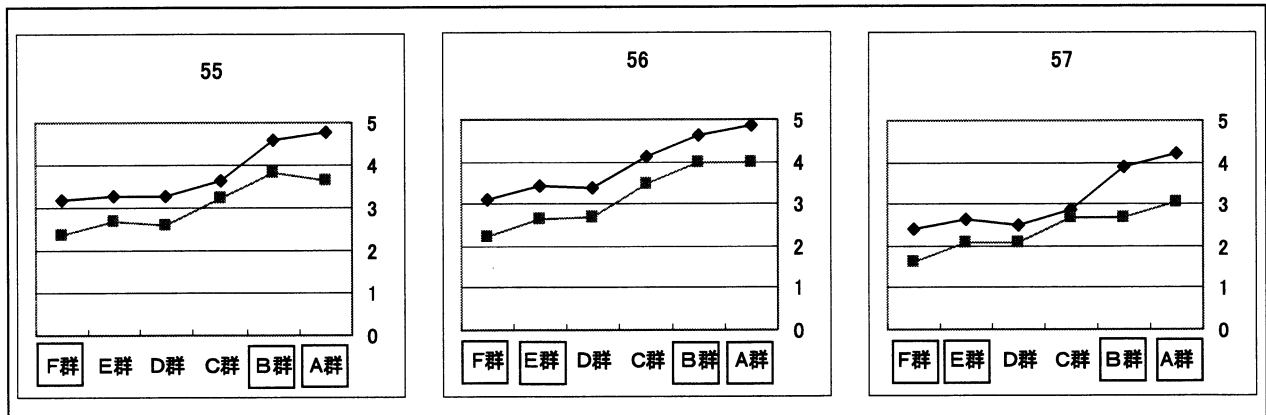


図1 すべての年齢群で有意差がみられた項目



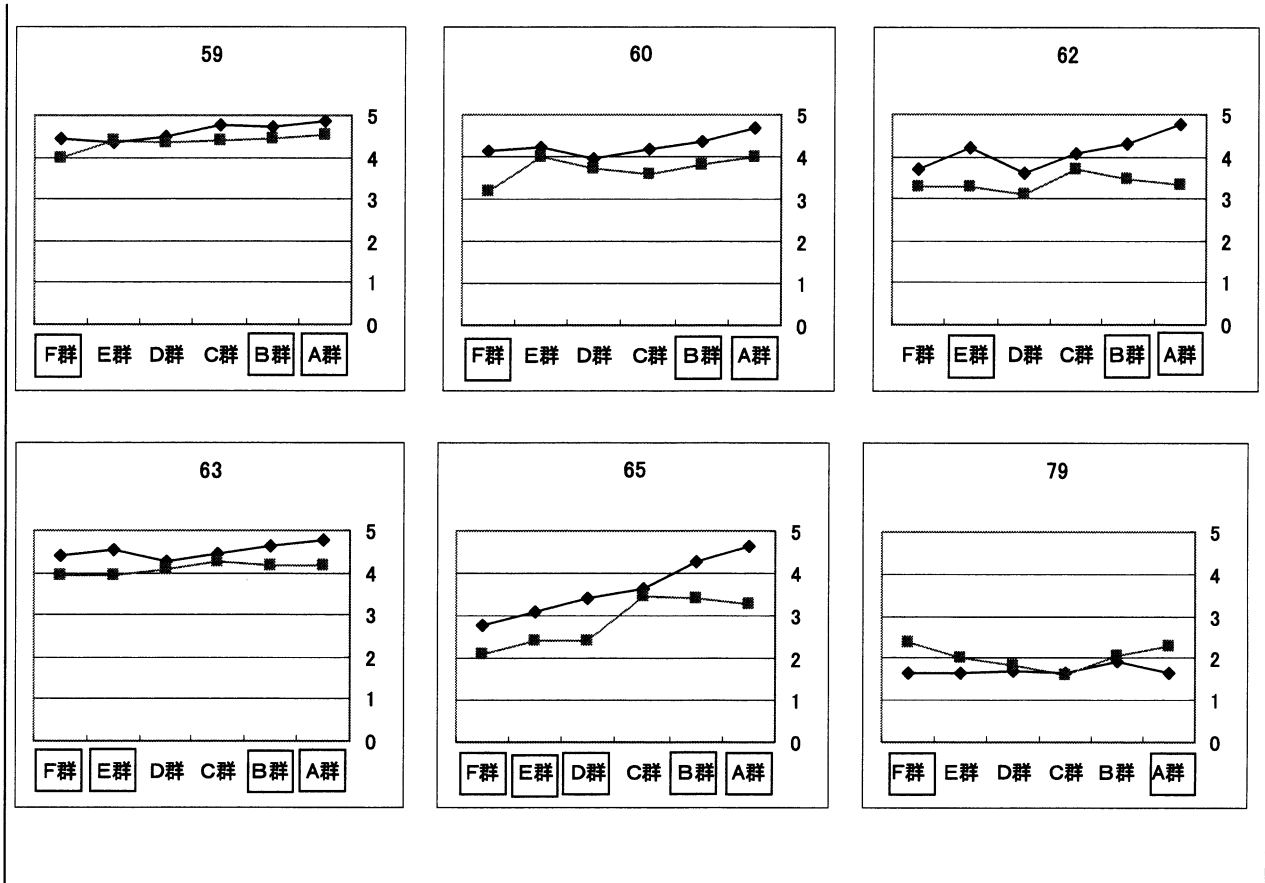


図2 主に年少児と年長児で有意差がみられた項目

表5 質問項目

5. 例えば「わ」と「れ」の違いなど、文字の細部を理解できる。
6. ぬりえやお絵かき等で、△や□をうまく描ける。
7. 人物画を描いた時に、人物の首や肩をうまく描ける。
9. 先生の手遊び（げんこつ山のたぬきさん等）を模倣できる。
10. 自分ひとりで手遊び（げんこつ山のたぬきさん等）ができる。
12. 読み聞かせの後で、その内容を聞いたら答えることができる。
13. 絵本・紙芝居などの読み聞かせが好きである。
15. しりとりや回し文（さかさことば）に興味がある。
29. ことばの理解は良いが、言葉の数が増えない。

これら9つの項目は、年少児群と年長児群で気になる子どもを見分ける指標となりうる可能性が高いといえる。

(3) 主に年中児と年長児で有意差がみられた項目

主に年中児と年長児で有意差がみられた項目を図3、表6に示す。図中の囲み線が付いている群が有意差がみられた年齢群である。

表6 質問項目

8. 絵本等を見て、絵本の一部（例えば、アンパンマンなど）を描ける。
20. 聞き返しが多い。
23. 靴を履くときに、右左がわかる。

これらの項目は、年中児群と年長児群で気になる子どもを見分ける指標となりうる可能性が高いといえる。

(4) どの年齢でも有意差が見られなかった項目

すべての年齢群で有意差がみられなかった項目の図4に示す。

質問項目54は、気になる子どもを見分ける指標にはなり得ないと思われる。

(5) その他

ここまで示した4つの分類にあてはまらなかった項目を図5、表7に示す。なお、図中の囲み線が付いている群は有意差がみられた年齢群である。

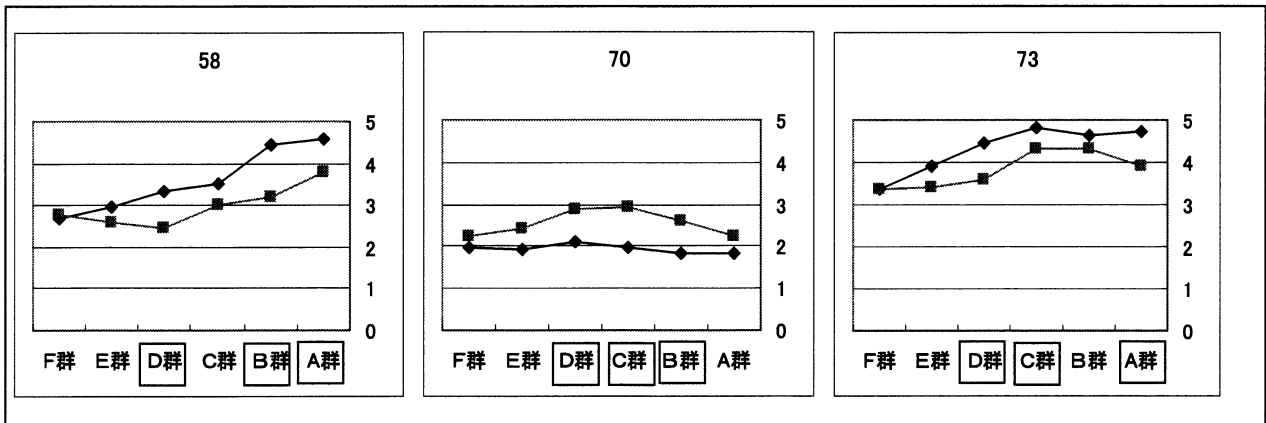


図3 主に年中児と年長児で有意差がみられた項目

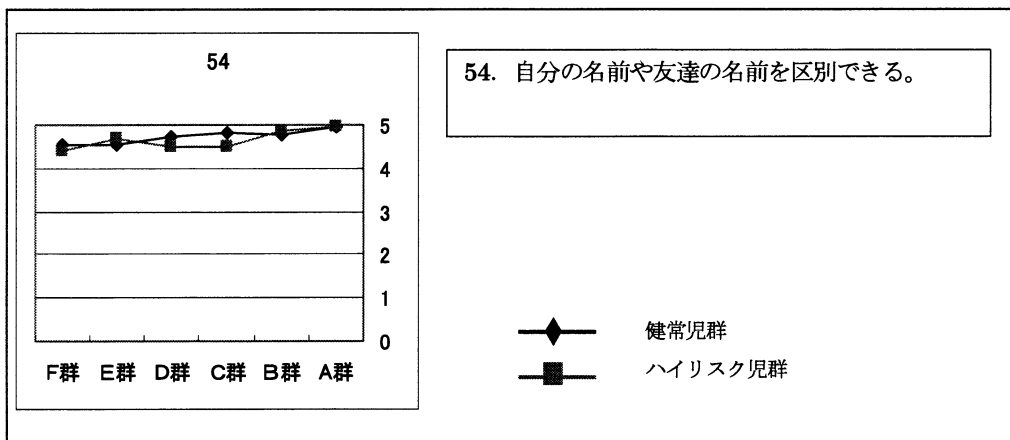
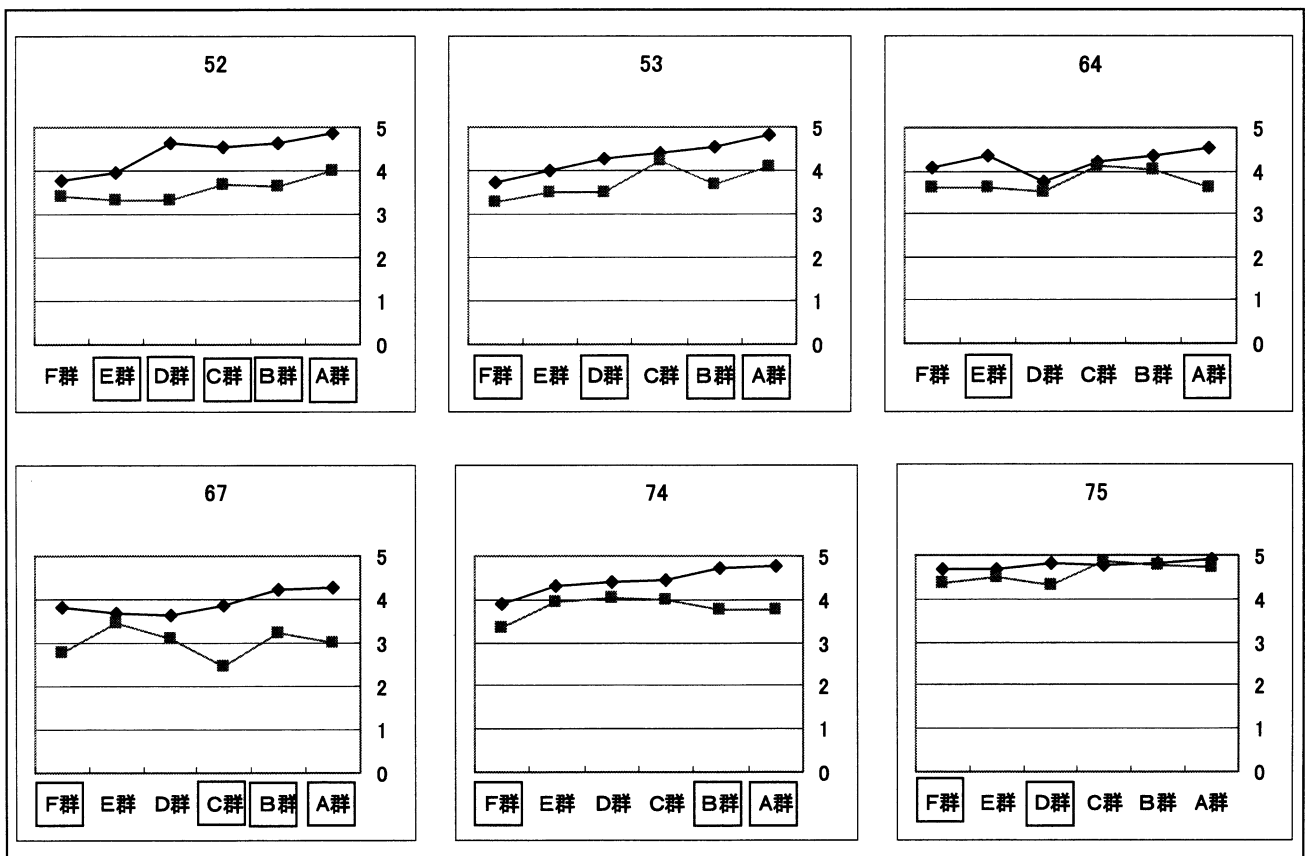


図4 どの年齢でも有意差が見られなかった項目



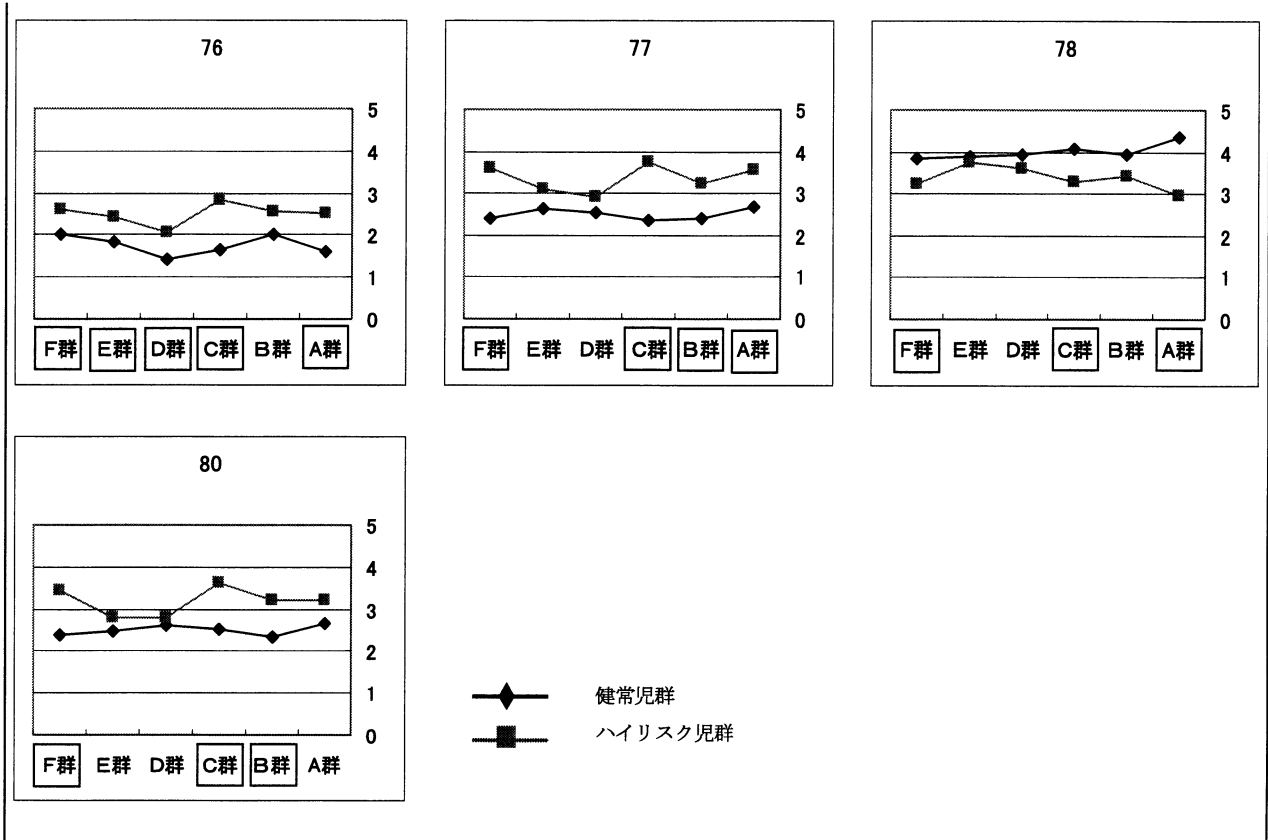


図5 その他

表7 その他に含まれる質問項目

- 52. 作品を作る時、はさみを一人でうまく使える。
- 53. 自由遊びの場面などで、平均台を一人でバランスよく渡れる。
- 64. 一人で絵本を見るのが好きである。
- 67. 一つの活動が終わった時、気持ちの切り替えがはやい。
- 74. 自分の服やカバンなどをうまく片付けることができる。
- 75. 体の中の目や口や耳などの位置を当てることができる。
- 76. 教室や運動場で、人や物におつかることが多い。
- 77. 周りの視覚的刺激が気になる。
- 78. どんな活動テーマでも積極的に活動に参加する。
- 80. 周りの聴覚的刺激が気になる。

- ③ 場の雰囲気や人の気持ちをうまくみ取れる。
- ④ 先生に指示されなくても一人で次の行動に移せる。
- ⑤ 今のできごとと過去の経験とをつなげて考えられる。
- ⑥ 先生の手拍子をうまくまねすることができる。
- ⑦ 人や物の名前を覚えるのが苦手である。

表8に示されるように、指示の行動化、リズム感、場の雰囲気を読み取り、独立の行動、経験の連合、拍の模倣、名称の記憶等が、ハイリスク群と健常児群のスクリーニング検査項目の第1次的なものとして考えられる。

(6) 読み書き行動から捉えた早期スクリーニング検査(案)の提案

以上の結果より、読み書き行動から捉えた早期スクリーニング検査の項目として以下のものが考えられる。

表8 読み書き行動から捉えた早期スクリーニング検査の項目

- ① 先生から指示された内容を行動に移せる。
- ② リズムをとるのがうまい。

IV. 今後の課題

現在、読み書き行動に問題が見られる聴覚障害児にもこの検査を適用している。軽度発達障害児は、閾値上は、聴覚障害が認められない。これらの結果も踏まえて、読み書き行動から捉えた早期スクリーニング検査を作成していきたい。

V. 参考文献

竹田契一他 (1997) LD児の言語・コミュニケーション障害の理解と指導 日本文化科学社